429

宮之迫遺跡

（曽於郡末吉町南之郷宮之迫）

位置と環境

遺跡は，町の中心部から南東に約７㎞の位置に所在し，標高約240ｍの舌状台地の縁辺部に立地している。

調査の経緯

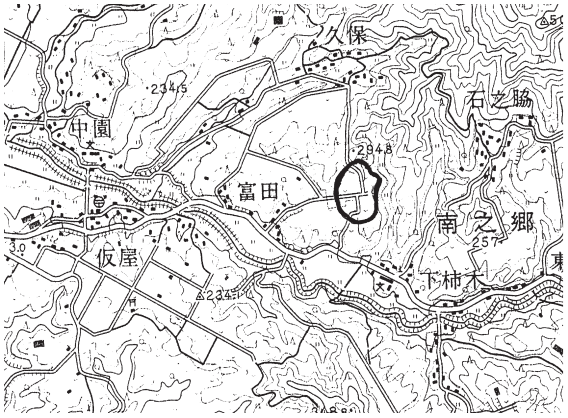
調査は，昭和55年（1980）に県営特殊農地保全整備事業に伴って，町教育委員会が調査主体となり，県教育委員会の協力を得て実施した。調査対象面積は，約4,000㎡である。

遺構と遺物

調査の結果，縄文時代中期後半から後期前半にかけての土器や石器が多量に出土し，竪穴住居跡や炉跡などの遺構も確認された。

遺構は，竪穴住居跡，炉跡，土坑，焼土などが確認されている。竪穴住居跡は１軒が検出されたが，開墾による削平などで切られており，わずかに床面が残されていただけであった。炉跡は２基が検出された。いずれも約50㎝の円形の掘り込みの中に礫を敷いているものである。２号炉跡の石は，石皿の破片を利用しており，接合の結果３分の２程度が復元できた。土坑は２基が検出された。いずれも形状が楕円形で，浅い皿状の形態である。中には土器や礫とともにドングリと思われる木の実の炭化物が入っていた。土坑１には，ほかに石錘が１点入っていた。焼土は，約50㎝の範囲が赤く焼けており，中には土器片が散布していた。

遺物は，霧島の御池を噴出源とする黄褐色で粒子の荒い軽石を含んだ砂質土層の中から出土した。この土は非常に硬く，厚い部分では80㎝をこえており，多量の遺物が重なるように出土し，掘り下げは困難をきわめた。



第１図　宮之迫遺跡の位置

出土した遺物は，多量の土器・石器のほかに土器片加工品や軽石製品などが出土している。

土器は，縄文時代中期後半から後期前半の時期と考えられるものがほとんどである。指先で施文した太形凹線文と呼ばれるものや，棒状のもので施文した沈線文と呼ばれるもので，直線や曲線を描いている。曲線や直線と縦の短い沈線を組み合わせたものや，直線や曲線のみのものなどがある。また，口縁部のみに施文したものや，底部まで施文したものもある。中には，このような文様は施文されず，貝殻条痕文のみのものがある。なお，この貝殻条痕文はほとんどの土器の内外面に施されている。口縁部は山形になるものや，突起を持つものも多く，山形部分は３～７のものがある。底面には網代や，木の葉の圧痕がついたもののほかに，数は少ないが鯨の背骨の圧痕がついたものもあり，土器を作る際の回転

写真１　遺物出土状況（１）

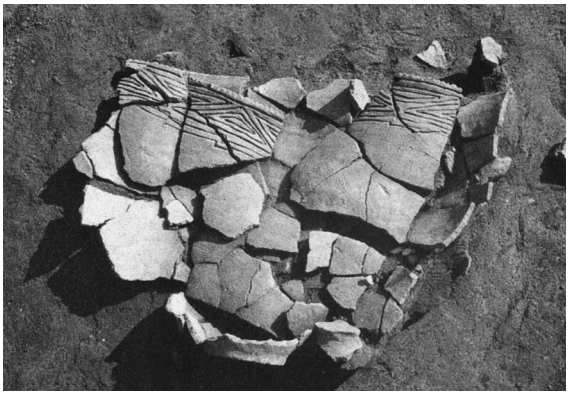


写真２　遺物出土状況（２）

台としての利用が考えられる。出土している土器の大きさは10cm程度のものから40cmをこえるものがある。

石器は，石錘，凹石，石斧，敲石類，磨石，礫器，石皿，縦長剥片及び横長剥片利用の石器，円盤状スクレイパー，石庖丁状石器などの石器が大量に出土した。

そのほかの遺物には，土器片加工品が大量に出土している。これらはメンコと呼ばれるもので，そのほとんどが土器片を円盤状に加工したものであるが，中には両端に抉りを入れて錘として利用したことをうかがわせるものがある。石製のものも１点出土している。ほかに軽石を加工したペンダント状の装飾品と考えられるものも出土した。

特徴

大量の土器と石器が出土していることがあげられる。中でも石器では，縄文時代に一般的に出土する石鏃や石匙などが全く出土せず，石錘，敲石類，石斧，磨石，石皿などが大量に出土している。このことはほかの遺跡における石器の組み合わせとその内容が違っており，生産様式について再考を考えさせる興味深い内容であるといえよう。

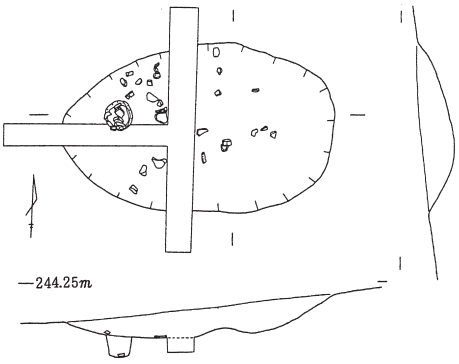
資料の所在

出土遺物は，末吉町教育委員会に保管されている。

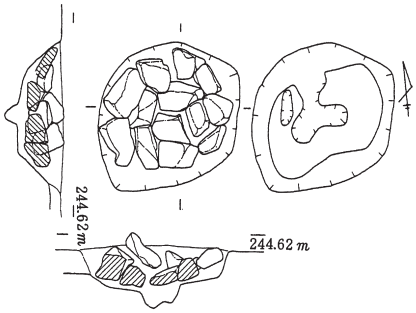
参考文献

末吉町教育委員会1981「宮之迫遺跡」『末吉町埋蔵文化財調査報告書』２

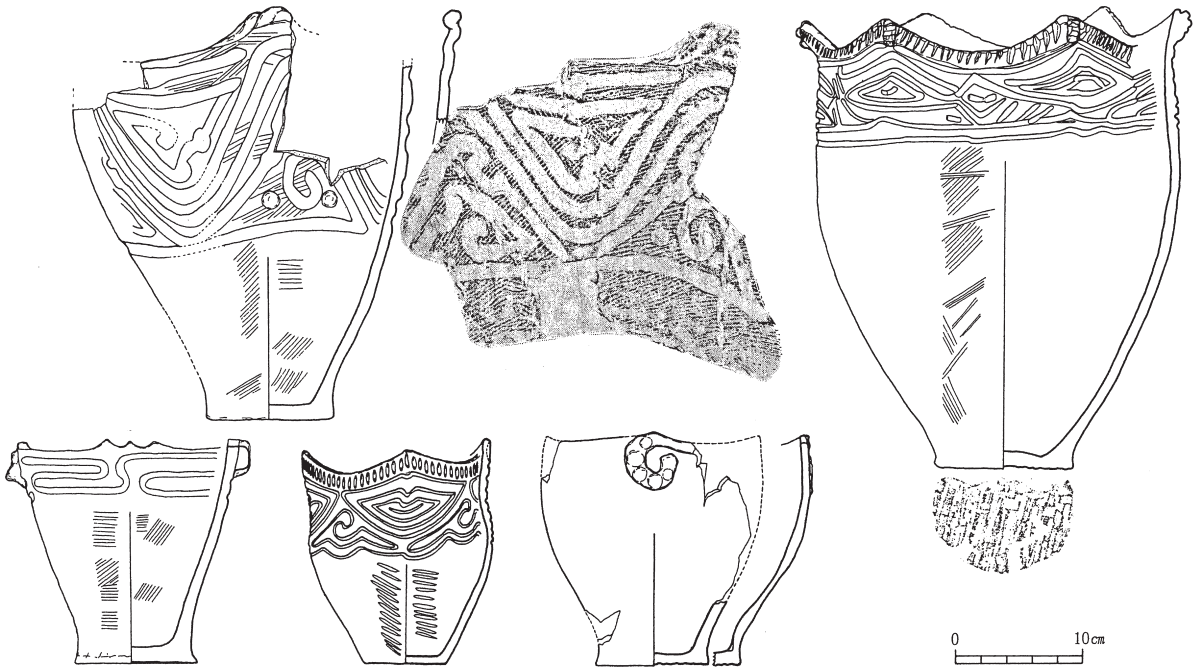
（井ノ上秀文）



第２図　土坑



第３図　炉跡



第４図　出土遺物（１）

第５図　出土遺物（２）